

札幌大学文化学部文化学会紀要

## 「危機と文化」発刊にあたって

札幌大学文化学部 前学部長 山口 昌男

危機の状態にあるということは、まだ生き生きとしているという証拠だといえます。危機を感じる能力がなくなったら、文化も、大学のような知的共同体であるべきものも、存在の意義を失うであります。札幌大学が文化学部を作ったということは、大学に対する危機の自覚がどこかにあったからに違いありません。

文化というものは理論的に言って、中心的な制度と、それと緊張感を持つ反対の傾向、この二つのバランスから成り立っていると、私は日本でも国際学会でも主張してきました。それは言葉ではいろんな形で言い表されており、初めの頃中心と周縁という言葉で語られていましたが、最近は周縁に対して、一過性のもの、あるいは過渡的の「エフェメラルなもの」という言葉で言い表されるようになってきました。そして今日、それが具体的な形で眼に見えるようになってきました。

今年、日本記号学会が札幌大学で行われますが、この大会の共通の課題として「文化

における恒常性と仮設性」というタイトルが決まりました。今日すべての領域において、この二つの問題が意識されるようになっていきます。たとえば銀行は安定したものである、恒常的なものである、と思われていましたが、金を貸したり、借ったり、保管したりという機能そのものが信用を失ってきました。銀行が典型ですが、巨大なビルディングも恒常的なものとして作られてきましたが、それはイメージとしては、実は仮設的なものにすぎなかった——『方丈記』的な、行く川の流れは絶えずするという風な、一過性のものであるということが明らかになったわけです。銀行だけでなく、すべてのものについて、そのような考え方をしてみる必要があります。

絵画でいうと、油絵は恒常的なものと思われていますが、今の若者からみると、マンガ的なものの方が瞬間的に心を捉える鮮度ははるかに強い。「若者は古典を知らない」と言っただけにしてはいけません。仮設的なもの、瞬間的なものはその凝縮度が高い、テンションが極めて高いということを認めなければなりません。音楽でも古典音楽に対してロックは、初めは周縁的なものとして低く見られた時期もあったけれど、今は若者の関心の中心を占めています。絵画においても、音楽においても、このような現象が起きています。

絵画を展示する国立博物館や美術館も、制度的にエイジェンシー化が叫ばれ、存在の基礎が脅かされているわけですから、美術館も恒常的なものの代表ではなくなってきています。昔はギリシャのパルテノンを模倣したスタイルで美術館を建築することがはやりでしたが、今ではそういう古典的な保証はなくなってきています。たとえば東京の青山にあっ

た、不動産屋が投資の対象として作った巨大な美術館が一夜にして消えたといった現象に見られるように、安定しているように見える文化も、恒常的ではないわけです。美術館の建物がエフェメラルだというよりも、今まではエフェメラルなものと恒常的なものは反対の概念として見えていましたが、今は、エフェメラルなものの中に、次の恒常性に向かうようなものが、瞬間的に見られるようになってきたということです。——政治でも、大学においても、同じようなことが言えるのではないのでしょうか。

若者はエフェメラルな存在であり続けてきました。ですから危機は、一番先に若者に表れるのです。『古事記』、『日本書紀』においても、不吉な異変が起こる前に、子供の歌の中には危機を表す最も強い媒体であると、多分自覚されていたのだと思います。それが、子供は制度的に大人になっていない存在、と社会が捉えるようになってから、社会は衰弱してきたのではないのでしょうか。いま起こっている子供の事件も、大人がなかなか捉えられないでいますが、しかし子供はエフェメラルな存在であり、それを身体で表すことによって、時代の危機を先に表現している。だから若者は、将来何になるにしても、自分の一過性ということを意識して、前の時代から渡されようとしている恒常化のプログラムには、組み込まれないように努力したほうがいいのではないのでしょうか。研究においても同じことが言えるはずです。このような精神によって、本誌「危機と文化」が編集されることを望んでいます。

(談)